

第1章

ラオスにおける支援事業



南北1,000キロに伸びる細長い国 ——ラオス人民民主共和国

ラオス人民民主共和国は、インドシナ半島の最奥にある内陸国で、ベトナム、カンボジア、タイ、ミャンマーおよび中国と国境を接し、南北1,000キロに伸びる細長い国です。

《現在のラオス事情》(2021年7月現在)

●ラオス人民民主共和国

1. 面積：24万km²
2. 人口：約710万人(2019年、ラオス計画投資省)
3. 首都：ビエンチャン
4. 民族：ラオ族(全人口の約半数以上)を含む計50民族
5. 言語：ラオス語
6. 宗教：仏教
7. 政体：人民民主共和制
8. 通貨：キープ(Kip)
9. 産業：サービス業(GDPの約42%)、農業(約15%)、工業(約32%)、製品及び輸入に係る税(約11%)(2019年、ラオス計画投資省)
10. GDP(名目)：164兆170億キープ(約189億米ドル)(2019年、ラオス計画投資省)
11. 一人あたりGDP：2,654ドル(2019年、ラオス計画投資省)
12. 主要貿易品目：(1) 輸出：電力、金、金鉱石(2020年ラオス商工業省)
(2) 輸入：機械類、ディーゼル、車両(2020年ラオス商工業省)
13. 主要貿易相手国：タイ、中国、ベトナム他(2020年ラオス商工業省)
14. 主要援助国(機関)：
(1) ADB(アジア開発銀行) (2) 日本
(3) IDA(国際開発協会) (4) 韓国 (5) 米国
(2019年、OECD(経済協力開発機構)/DAC(開発援助委員会))
15. 在留邦人数：833人
(2020年10月現在、海外在留邦人数調査統計)
16. 在日ラオス人数：2,917人(2020年6月、入管発表)



カンバイ農場への道路

《当時のラオス事情》

●ラオス王国

1. 人口：192万人(1963年推計)
2. 首都：ビエンチャン 王都：ルアンプラバン
3. 政体：立憲君主制
4. 主要援助国：(1965年) アメリカ

【1】 事業の目的

1. 機械力の導入による管理作業の近代化
2. 灌漑による養蚕年中飼育の実現
3. 施肥・消毒の徹底による収繭量の安定化
4. 蚕室の大型化による量産飼育の実現
5. 日本種（乾季）による収繭量の増大

【2】 事業の概要

〈1970年度事業内容〉

1. 養蚕（1970年5月27日から6月18日まで）
 - ・日本種、在来種、交雑種の3種類の試験飼育を3期間に分けて実施。
 - ・試験飼育の段階のため、事業として大量飼育をするに至らず。
2. 森林伐採
 - ・8ha（80,000mi）の森林の伐採と開墾。
3. 養蚕技術指導員の派遣
 - ・養蚕技術派遣員として青木丈幸と今井収をラオスへ派遣。

〈1971年度事業内容〉

1. 桑園造成（13ha）
 - ・新桑園1.5haにケオ種を植え付ける。
 - ・4ha分13,000本の桑苗を育てる。
ラオス避難民に桑苗2,000本を提供。
2. 養蚕
 - ・日本種3箱の飼育を2回実施、収繭量63kg
 - ・日本種×在来種3箱の飼育を実施、
収繭量55kg

〈1972年度事業内容〉

1. 桑園 3ha分7,500本の桑苗を植える。
2. 養蚕 飼育回数 8回
収 繭 量 400kg
3. 建築計画
 - ・蚕室、堆肥舎、消毒用プール、給水塔の建築

〈1973年度事業内容〉

1. 園芸技術者の派遣
 - ・清水芳洋が青年海外協力隊園芸担当派遣員としてラオスに着任する。



ラオス到着の次の日、日本から持参したコンフリー植え付けを行う
（農場にて、1970年2月22日）



カンバイ農場における桑苗作り



建築された蚕室、給水塔（1972年）

レイタク・カンバイ模範農場
(約100ha)



〈1974年度事業内容〉

1. 畜産専門家の派遣
・山口明が現地へ派遣される。
2. 養蚕 収穫量 300~500kg
3. 「レイタク・カンバイ模範農場計画案」「ラオス王国養蚕開発計画案」の構想

〈1975年度事業内容〉

1. 桑園 5haの桑園造成、3haに桑苗の植え付け実施。
2. 養蚕 飼育回数 7回
収穫量 611kg
3. 製糸技術派遣員の研修
①青木丈幸が千葉県繭検定所や恵南産業株式会社において製糸技術研修を行う。
②松本哲弘が海外子女教育振興財団よりピエンチャン日本人学校の教諭を委嘱され赴任する。

〈1976年度事業内容〉

1. 事業の撤収
①派遣員が帰国する。
②すべての施設や資材を現地に引き渡す。

[3] 事業の経過

① レイタク・カンバイ農場設立までの経過



蚕室の内部
(現地の蚕具を使つての飼育)

麗澤大学中国語学科教授・奥平定世氏は、中国研究者として中国と東南アジアの言語と民族に関する研究のために、たびたび東南アジア各地を訪ね、その中でも特にラオスに興味を持ちました。そして1959年からラオスでの調査を開始、ラオスのビエンチャン市内で病院を開業されていた小川蔵太医師との出会いから、ビエンチャン商工会議所会頭のカンバイ・ピラパンデ氏を紹介されました。カンバイ氏はビエンチャン市内で農業機械の代理店や製材所、農場などを手広く経営されていて、ラオスの経済的独立を図るためには、これら

の農場経営について日本の技術協力が必要なことを奥平氏に強く訴えました。

奥平氏はそれに応えるべく、帰国後、ラオスにおける開発援助の同志を募りました。それは1964年、当協会の設立前のことでした。そして、奥平氏の献身的な働きかけにより、ビエンチャン市内から北西25キロの地に、レイタク・カンバイ農場が設立されました。

2 レイタク・カンバイ農場設立後の経過

1964年6月に、当時の財団法人道徳科学研究所の廣池千太郎次長、同研究所の長谷虎治評議員が現地を視察し、同年11月、学校法人廣池学園から池田信輔氏と杉本滋氏がレイタク・カンバイ農場に派遣されました。当時、農場の総面積は約100ha、二筋の湿地帯を挟む丘陵地で、この湿地帯は近辺では珍しく、ラオスの年間の半年を占める乾季にも絶えず水が流れていました。開拓面積は13haで、そこにはパイナップルを主にしてココヤシ、マンゴー、ライチなどの熱帯果樹が植えられていました。近くの村落までは約3km離れたジャングルのそばに位置し、農場内には電気・ガス・水道・電話などのライフラインは全くありませんでした。

そのような環境の中で、池田氏と杉本氏は1968年までの4年間、約10名の現地スタッフとともに農場開拓に従事しました。まず湿地帯の一部に排水を行って野菜畑を造成し、各種野菜の栽培を試みました。中でも濃紫色の日本ナスは市場でも珍しがられ、栽培・販売ともに成功しました。農場内の2つの池では、鯉、雷魚、鯰などの養殖も行いました。

また、手付かずの丘陵地を開拓し、5haの桑園を造成しました。これにともない蚕室二棟を建築し、養蚕事業に着手しました。蚕室の建築にあたり、害虫の侵入を防ぐために周囲に水溝を巡らしたり、網を巡らしたりするなど、さまざまな工夫を取り入れ、従来の蚕室を大幅に改善しました。

もともとラオスでは、古くから養蚕業が行われていましたが、



現場を歩き造園計画を立てる



ジャングルの開墾



繭を座繰りする現地の女性

蚕の品種・品質ともに貧弱で、また製糸作業も座繰^{ざぐり}を使用した手作業で行われていました。この養蚕業の近代化は、カンバイ氏の要望課題の一つでもありました。また、現地の人々がより豊かな生活を送れることを目的として、将来的にこの養蚕業・製糸業を海外への輸出事業として発展できるよう、当開発事業の主軸として力を入れていくようになりました。

池田氏と杉本氏の派遣以降も、当協会の設立にともない、廣



桑園の造成をする今井收氏

池学園・麗澤高校から若い人材がラオスへと派遣されました。1969年には、淡島成高氏が現地責任者としてレイタク・カンバイ農場に派遣されました。また同年、千葉県蚕業試験場における今井收氏と青木丈幸氏に対する養蚕業の研修が始まり、研修終了後の1970年に、両氏は海外開発要員として現地へ派遣されました。そして、1973年に清水芳洋氏が千葉県の農業試験場での研修終了後、園芸担当員として現地に派遣されました。その後、1974年に畜産専門家として山口明氏が現地へ派遣されました。このように、

レイタク・カンバイ農場での開発事業の進展にともない、池田氏と杉本氏が着手した養蚕事業はさらに拡大されていきました。また、新しい蚕室の建設、堆肥舎、消毒用プール、給水塔などが建設され、農場内の設備も整ってきました。

栽桑事業は今井氏が担当し、当初13haある農場で1haしかなかった桑畑を4haまでに拡大し、そこで桑苗の栽培が行われました。1haあたりの桑畑には約2,500本の桑苗が植えられ、収量は約10tになりました。農場が湿地帯に位置していたこともあり、適度な水分が確保できたことと、腐葉土が多くあったため、桑苗栽培の事業は成功しました。

養蚕事業は青木氏が担当し、蚕種の品質改良が行われました。1箱に約18,000頭の蚕を飼育、1箱から約20kgの収繭量を目標とし、ラオスの在来種・日本種・2種の交配種など、さまざまな蚕種を使用した試験的な養蚕事業が行われました。養蚕事業の成功にともない、乾繭技術・製糸技術を学ぶために、青木氏は日本国内でさまざまな技術研修を受け、ラオスへ日本の優れた技術を導入しました。

園芸事業は、清水氏を中心に行われました。ラオスの農業人口は全人口の85%で、食糧自給率は50%という状態でした。残りの50%はタイなどからの輸入品でまかっていた。乾季と雨季という気候から、野菜を栽培できる時期は年間の約半分で、品質もタイのものより劣っていました。これらの問題を解決するために、米をはじめとしてさまざまな野菜の試験栽培が行われました。また、山口氏は養蚕事業一般から堆肥作り、土地改良などの事業を担当しました。



湿地を利用した桑苗床
(乾季に育繭し雨期に植え付け)

3 ラオスにおける事業の中止

当時のラオスは王制で、アメリカから援助を受ける自由主義国家でした。しかし、1972年頃からパテト・ラオ（ラオス愛国戦線）の勢力が強くなり、1975年にラオスの王制が廃止され、人民民主共和国が樹立されました。自由主義国家から社会主義国家へと変わり、ラオス政府が西側諸国からの援助を拒否し、経済にも勢いがなくなり、治安も不安定になっていきました。レイタク・カンバイ農場の現地スタッフの中からもラオス政府に徴兵される人がありました。また、ガソリン、食料品、日用品などが不足し、外出禁止令が発令されるなど、現地での活動が制限されることになりました。

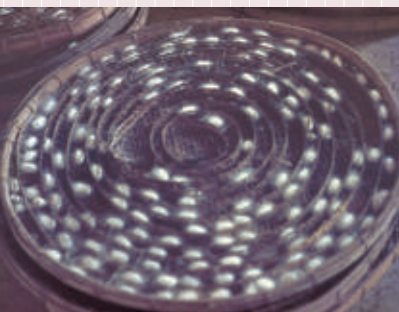
こうしたラオス国内の情勢悪化にともない、ラオス国内の状況を当協会に説明するため、派遣員が相次いで帰国。1976年に開催された当協会の理事会・評議員会で、ラオスでの養蚕事業の完全撤収が決定されました。レイタク・カンバイ農場の管理・運営をすべてカンバイ氏に引き渡し、事業撤収業務を終了した青木氏が1977年に帰国し、ラオスでの養蚕事業は中止されました。

〔4〕 事業の成果

事業を中止するまでの間、淡島氏をはじめ、今井氏、青木氏、清水氏、山口氏は、ラオス国の発展とラオスの人々の幸福を願



日本の回転籠（まぶし）



竹で編んだ現地の籠（まぶし）



完成したタート・インハン小学校の
新校舎

い、20代の数年間をラオス国での活動に献身し、森林伐採、桑園の造園、養蚕、園芸、畜産など、さまざまな農業開発を行いました。ライフラインのない不便な現地で、すべての作業が派遣員、現地スタッフの肉体労働によって行われました。現地の若いスタッフとともに、作業を行っていく過程には、言葉、習慣、文化の違いから多くの障害がありました。しかし、互いに協力し合って困苦・欠乏を乗り越えた彼らの間には、50年経った現在も薄れることのない強い絆があることでしょう。

ラオスでの事業は、その事業の撤退後、ラオス国内において、これらの活動の成果が目に見えて引き継がれたとは言い難いものでした。しかし、農場開設やダム建設等、明らかな成果の残るものだけが開発援助なののでしょうか。協会の設立にあたり、なぜラオスに農場を開設するのかという問いに、奥平定世氏は次のように答えています。

「ラオスに農場を開くというのは、単に農業をやってどうしよう、というような目的ではないのです。それは、われわれ日本人が本当の愛情をもって、開発途上国家であるラオスの人心を開発しなければいけないというような意味合いから考えておったのです。日本から若い人が行ってラオスを研究する。そしてラオス人と親しくなっていくと同時に、日本を正しく理解してもらい、彼らを精神的にも物質的にも豊かにしてあげる。こういうふうにしていくことが、ラオスの政治・経済の面においてもよい結果が望めるのではないかと私は考えておるわけです。これは日本のため、またアジアのため、さらに世界人類のためであろうと思います」

21世紀の今、開発途上国に対する援助は、建設事業を中心としたハード面から人材育成などのソフト面へと、その形態が移行されてきています。当協会は50年前に、すでにこのようなソフト面の援助を目標とし、多くの若い人材を現地に派遣してきました。そして、現地で働く青年たちのほとばしる至誠と情熱がラオスでの事業の推進力となり、ラオスでの開発事業が現地に残した成果だったと言えるでしょう。「ラオスの土になる」と開発途上国での仕事に情熱を傾けた青年たち、彼らの強い熱意に賛同して心のこもった支援をくださった有志の皆様、純真で素朴な現地の人々、そしてさまざまな場面で形成されていった

ネットワークは、今日の協会活動のあらゆる基盤になったといえます。

【5】 ラオス教育支援事業

1 タート・インハン小学校の校舎を再建

麗澤海外開発協会は、ラオス南部サワンナケート県のタート・インハン小学校から「老朽化した小学校校舎を再建したい」との要請を受け、資金等における協力・支援を始め、2007（平成19）年12月よりSVA（社団法人シャンティ国際ボランティア会）とも協力して、新校舎の建設工事に着手しました。

2008年2月に行われたタイとラオスのスタディツアーで訪問したときには、旧校舎が取り壊され、新校舎の下地部分ができただけで、それまで雨風が吹き込み、電気のない校舎で学んでいた小学生たちは、新校舎建設を非常に楽しみにしていました。

新校舎の建設にあたっては、事前に校長、村長、教育省の役人が十分に話し合いの場をもち、建設中の建材の管理なども村人の協力を得て進められました。タート・インハン村は教育への関心が高い地域であり、校長をはじめ村人の期待も大きく、児童も勉強への強い意欲を持っていました。しかしながら、現金収入が少ない村人の生活では、教育にかかる負担が大きく、加えて政府からの教科書配付が1994年以降に止まっているなど、老朽化して倒壊の危険がある校舎の再建以外にも教育環境を改善していく必要がありました。そこで、新校舎を建設した後は、校舎管理やスタッフ育成を進めるなど、ソフト面でもフォローアップしていくことになりました。

タート・インハン小学校の新校舎贈呈式は、2008年8月20日に挙行され、麗澤海外開発協会から木下廣太郎常務理事、廣池英行理事、渡辺朋子事務局員、そしてスタディツアーに参加していた麗澤大学



新校舎前にてテープカット



小学校校長より感謝状の贈呈



新校舎の贈呈セレモニー



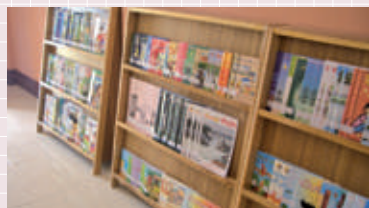
ラオスの伝統の儀式で参加者の幸福を願う（パーシー）



新校舎での授業風景



完成したタート・インハン小学校の
図書館



図書館の内部

の学生も参列しました。

式典には、校舎建設に協力いただいたSVAのラオス事務所長、スタッフのほか、ラオスの官公庁関係者、教育関係者、住民、児童等、200名以上が参列し、村の教育の発展に対する大きな期待と熱意が感じられた式典となりました。また新校舎の教室には、新しい黒板、机、椅子が搬入され、9月から始まる新学期より使われるとあって、児童たちは大変楽しみにしている様子うかがえました。学校関係者や村人は、感謝や喜びの言葉とともに「より良い教育を行い、子供たちには将来のラオスに役立つ人間になってほしい」という思いを幾度となく述べていました。

② タート・インハン小学校の図書館を建設

教育支援事業として進めていたラオス・サワンナケート県タート・インハン小学校の図書館が竣工しました。この図書館は、2008（平成20）年に竣工したタート・インハン小学校の校舎再建に続いて麗澤海外開発協会が教育支援事業として建設したものです。2011（平成23）年2月17日に同校で開催された図書館の贈

贈呈式参列者の感想

タート・インハン小学校の校舎贈呈式に参列しました

ラオスのタート・インハン小学校へ到着すると、校庭のテントには小学校の児童や多くの村人が集まっており、日本からの一行を花の首飾りで出迎えてくれました。

厳粛な中、式典が始まり、ラオス側の出席者からのスピーチに続き、麗澤海外開発協会から挨拶を行いました。記念品の交換に続き、新校舎の教室においてラオスの伝統儀式であるバーシーの儀式が執り行われました。村人や先生、児童一人ひとりから祈りの言葉とともに糸を手首に巻いてもらうという貴重な体験をしました。昼食会の料理も日本人に合わせて辛さを控えていただいたり、日が傾くとテントをずらしたりして、言葉以上の気持ちが伝わってきました。日本からの参加者たちは皆、ラオスの方たちのおもてなしに感激で胸がいっぱいになったようです。

後日、現地より「新しい教室で、風雨を心配することなく、安心して勉強している児童たち」の様子をとらえた写真が届きました。「勉強できることが楽しい！」——そういう子供たちの姿に、あらためて考えさせられる旅になりました。

呈式には当協会の竹原茂副会長をはじめ、山中香事務局員、麗澤大学の学生が参列しました。

式典には、建設に協力いただいたIV-JAPANの富永幸子代表とスタッフのほか、ラオスの官公庁関係者、教育関係者、住民、児童等、200名以上のたくさんの方々方に参列いただき、村の教育の発展に対する大きな期待と熱意が感じられた式典となりました。図書館には200冊ほどの書籍が納められ、当協会からは日本の童話等の書籍も贈呈しました。ラオス教育局からは感謝状を頂き、麗澤大学IEC（外国語学部国際交流・国際協力専攻）の学生（グループRISOVP〈リソップ〉）からは手作りのプレートを贈呈されました。

この図書館は、開館の間は児童以外に村人も利用でき、図書館司書の研修を受けた小学校の教諭10名が交代で管理しています。今後はより多くの人々に活用していただき、さらにサワンナケート県と麗澤海外開発協会がよりいっそう交流できることが期待されています。



感謝状の贈呈



教育関係者と記念撮影

贈呈式参列者の感想

タート・インハン小学校の図書館贈呈式に参列しました

タート・インハン小学校へ到着すると、児童たちは勢ぞろいで出迎えてくれ、校長、教員、官公庁関係者、保護者の方々が一堂に会して図書館贈呈式が執り行われました。最初に建設の報告があり、建設の担当したIV-JAPANの富永幸子代表より挨拶があり、続いて麗澤海外開発協会の竹原茂副会長から挨拶がありました。麗澤大学生からは、手作りの記念品贈呈とスピーチがありました。その後、図書館見学、記念植樹でジャックフルーツの苗を植え、ラオスの伝統儀式バーシーが行われました。

昼食会では、小学校の児童による歌の披露と音楽演奏などがあり、ラオス料理をタート・インハン村の皆さんが用意してくださり、これまでに食べたことのないおいしい味に日本からの参加者も感激した様子でした。

これからは、図書館を運営していくために課題や問題点などを教員や保護者が話し合い、より良い図書館になるよう協力していくことが合意されました。





開発途上国に 愛の手を差し伸べよう

—— ラオス産業の自立をめざして

あわしま なりたか
淡島 成高（麗澤大学名誉教授）

1969年から5年間、ラオス駐在の責任者としてラオスに赴任した私は、現地駐在員ならではのかけがえのない貴重な体験をすることができました。

奥平定世教授の熱意に動かされて

1966年3月に麗澤大学中国語学科を卒業した私は、中国語を使う仕事がしたいという念願がかない、日中貿易の商社に入社しました。そこでは入社1年目から会社代表で中国に派遣されるなど、重要な仕事を任されていました。喜びのうちに、無我夢中で2度、3度と中国出張が続いていた2年目の頃のことです。恩師の奥平定世教授（麗澤海外開発協会設立時の常務理事）から「淡島くん、ラオスへ行ってみないか」と勧められました。

当時、中国は文化大革命の真っ只中で、対外的に門戸を閉ざしていた頃ですから、精神的には重苦しく、出張しても緊張の連続でした。また、現地では、つい昨日言葉を交わした大手ダミー商社の社員がスパイ容疑で捕まるなどといったニュースも流れていました。もっとも、そうしたことが退社を考える唯一の要因ではありませんでしたが、文化大革命の嵐は日本国内の業界にまで影響し、仕事以外に少々疑問を感じていた頃、ラオスの話が飛び込んできたのです。

麗澤海外開発協会の設立の原動力は、奥平教授の熱意そのものであったと思います。私は、学生時代に事あるごとに奥平教授からラオスの話を聞かされていたせいか、あまり抵抗がなく「行こうか」という気になりました。しかし当時はまだ協会の設立も実現していないし、私の現地での仕事内容も明確なものでもありませんでした。また、新しい仕事ですから、躊躇する気持ちもありましたが、開発途上国での仕事に情熱を傾けるのも

夢があっただけではないかと、手探り状態ながら1969年8月、現地に向けて出発しました。

その一年前の1968年8月増刊号の『れいろう』の特集「海外に伸びる」の中に、平塚益徳氏（当時・国立教育研究所所長）がラオスを訪問されたことや、麗澤海外開発協会の設立準備の状況などが紹介されていました。その記事の中に大きく取り上げられていたのですが、私たちが派遣される前の池田信輔氏（その後、OTCA〈海外技術協力事業団〉の養蚕専門家としてラオスに赴任）と杉本滋氏（麗澤高校定時制卒業・麗高16期）のカンバイ農場での想像を絶する苦労があっこそ、協会の設立に大きく動いたのではないかと思います。また、それを気長に物心両面でバックアップし支えてこられた内田武男氏（協会設立時の監事・モラロジー研究所参与）などの心のこもった支援のお気持ちが、派遣された我々にも伝わってきたように思っています。



カンバイ・ピラパンデ氏（左）と
奥平定世教授（右）

のどかな時の流れの中で

ラオスは現在、ラオス人民民主共和国（1975年～）という国名になっていますが、当時はラオス王国という名称で、ワッタナ国王を戴き、ラオス国民もこぞって尊敬の念を抱いていました。また、何よりも敬虔な仏教国（上座部仏教）で、争いごとを好まない柔和な国民性を持っていました。しかし、内外の情勢はのどかな農業国をそのままにさせておかず、パテト・ラオ（ラオス愛国戦線）が活発に動き出すなど、隣国のベトナム戦争に大きく左右させられました。当初はアメリカの人的・物的支援に頼るところが大きく、経済的にもいくらか潤っていたのですが、戦争が拡大されるに従って北部からの難民が増えてきたり、夜間外出禁止令が出るなどの変化が出てきました。もっとも、市内では新聞で報道されるような緊迫した場面は全くと言っていいほどなく、あとで日本の新聞を見て、こんなことがあったのかと知る程度でした。

ラオスには当時、これといった産業がなく、大きな工場は唯一たばこ工場だけと言われていました。タイ、カンボジア、ベ



トラクターに乗る（1974年1月21日）

トナム、中国、ミャンマーに囲まれた日本の本州ほどの内陸国で、国全体の70%が山岳地帯であり、1年が雨季と乾季にはっきり分かれ、雨季にはよく水害に見舞われていました。平野部では水稲が、山間部では焼き畑による陸稲が主でしたが、実にのんびりした国民性でした。当時の農業援助を物語るものとして、ある国が稲作の技術援助をしたところ、例年より2倍の収穫があり、大いに満足したのですが、次の年に行ってみると、去年は倍取れたから今年は休んでいた、という話があったほどです。また、日本も専門家をはじめ青年海外協力隊を数十名派遣するなど、当時は世界で最も多くラオスに派遣していて、農業、産業技術、電信電話、医療、スポーツ、日本語など、あらゆる分野で専門技術を持った日本の若い人たちが活躍していました。我々は、政府援助事業として派遣された彼らとは立場が違いましたが、彼らとの交流を通して、お互いにラオスのために何か力になろうと刺激し合ったように思います。

私が赴任して1年目ぐらいに、市内に信号が付きました。当初は、四六時中お巡りさんが見張っていたのが思い出されます。

市内に初めて4、5階建てのホテルができたとき、エレベーターを見るために、弁当持ちで見学に来た人がいたということも聞きました。テレビはタイの放送を傍受していて、電話も主だったところにしかなく、直接行ったほうが早いという状況でした。日本からは時々電話連絡をするようにと指示がありましたが、どこで電話を借りようと苦勞したものです。鉄道はありませんから、乗り合いタクシーか、市内は人力三輪車のサムローといわれるものが足代わりでした。しかし、こうした環境が

不便で苦痛だったという思い出はみじんもなく、のんびりとのどかに時が流れていったように思います。

日本人の駐在者も、大使館関係者、OTCAの専門家、青年海外協力隊をはじめ、民間ではナムグム・ダム建設（日本政府援助）の関係で間組、日本工営、それに商社は三井物産と東洋綿花の2社だけで、またアメリカ軍関係の任務に携わっていた数人の邦人でした。このように在留邦人全員と親しく知り合いになれ



人力三輪車のサムロー

るほどの少人数で、日本人会も中華料理屋さんの一室で一堂に会せるほどでした。中でもレイタクは5、6人いましたから、民間の一単位としては大所帯でした。

カンバイ農場での生活

当時、首都のビエンチャン市内から北方25キロ地点にレイタク・カンバイ模範農場がありました。市内を外れると、すぐに舗装道路は途切れて赤土の道が続き、乾季にはもうもうと土煙をあげ、雨季にはハンドルを取られるほどの道のりでした。農場の全面積は100haありましたが、私が行った当初は、農園らしいところは桑畑、パイナップル畑、養魚池など一部の地域だけでした。桑畑の近くには10坪ほどの蚕室があり、農場の中央部に2階建ての住居(1階は倉庫兼蚕飼育室)がありました。2階には水洗用便器はありましたが、電気、水道はありません。入り口部分に屋根からの雨水をためる水槽がありましたので、その水を利用したり、外の井戸からの水を運びあげたりして食用に使っていました。

裏手には労働者用の住居があり、本格的な農場生活が始まった頃からは、炊事・洗濯などを引き受けてくれる家族が住み、我々の世話をしてくれました。夜の明かりはアルコール・ランプで、日頃の手入れは大変でしたが、読み書きができる明るさでした。風呂はありませんから、池のほとりで体を洗っていました。水辺でパチャパチャやっていると、3、4センチもあるヒルがひょろひょろやってくるのですが、それをよけながら水をかぶっていました。また、乾季の冷える頃などは少々辛いアプナム(水浴び)となりました。

南国の風景に、水牛が子供を背に乗せてゆったりと歩く絵や写真を見かけますが、この水牛には手を焼いたり驚かされたりしました。農家ではたいい水牛を1、2頭飼っているのですが、雨季の稲が植わっているときはしっかりと繋



ナムグム・ダム



タートルアンの祭り。
ワッタナ・ラオス国王に絹糸を
献上するカンバイ氏の子供たち



ダルアン・ラオス万博で養蚕について
説明するカンバイ氏



気持ちよさそうに水浴びをする水牛

れているのですが、取り入れの終わった乾季には放し飼いになります。農場には周囲に柵が施してあるのですが、夜中にはどこからか侵入し、首に付けたカウベルをカランカランと鳴らしながら入ってきて、桑の葉を食べたり、桑の木に体をこすりつけたり、やりたい放題されるわけです。また、車に乗っていて道路で水牛にぶつかったことがあります、この時は向こうが一回転したものの、こちら

のラジエーターがやられてしまいました。ビエンチャン市内から農場までの25キロは、水牛が飛び出してきたり、鶏が飛び込んできたりして、ラオスならではの光景が随所に見られました。

地元の名士カンバイ氏

当初、農場には現地の人が一人いて、共同事業者のカンバイ氏の指示に従ってそこを管理していました。私もその人と一緒に、見よう見まねで養蚕を始めました。何しろ蚕については、千葉県の蚕業試験場で見たことはありましたが、自分で飼ってみるのは初めてのことでした。蚕が何回か脱皮をしたり眠りを繰り返したりすることなど知らないものですから、いくら桑をやっても食べないので不安になったこともありました。

カンバイ氏は、ビエンチャン商工会議所会頭という肩書きを持っていました。どのような事業が主であったかははっきりしませんが、商品の輸出入業務や製材工場、タイヤ工場が主業務だったのでしょうか、小さな宿泊施設も持っていたようです。もちろん、繭が収穫できた時は、軒先でおかみさんや女性陣総出による糸ひきも行われていました。カンバイ氏の父上の逝去後、何年かして本葬がラオスの大僧正の読経で執り行われましたが、式にはプーマ首相も参列されていたので、ビエンチャンの名士だなあと実感しました。また、子供の結婚式では、自宅の庭にステージを設けるなど派手な演出もあり、実業家ぶりをうかがわせましたが、そんな場にはいつも大臣や



カンバイ氏夫妻

将軍、警察署長といった来賓が顔を見せていました。

毎年秋には王室の菩提寺であるタッラン寺の境内でラオス万博のような催しがあり、日本をはじめ各国が自国を紹介したりするパビリオンができていましたが、その中にはカンバイ氏のブースもあって、タイヤ工場や我々の養蚕・製糸コーナーも設けられました。そして、ある年にはワッタナ国王自らが参観に来てくださり一同大いに感激しましたが、これもカンバイ氏の実力があってこそその出来事でした。

その後、カンバイ家のご夫妻は亡くなりましたが、二男のケマサ氏が跡継ぎになってトヨタ自動車のディーラーになって活躍しています。

情熱を持って取り組んだ事業

私に続いて、千葉県蚕業試験場で研修を積んだ青木丈幸氏と今井収氏の二人が派遣されてきました。彼らは実に精力的に現地の人たちとも溶け込み、終始前向きに仕事に取り組んでくれました。トラクターや蚕具などが揃ったこともあり、桑の苗木作りから桑園の拡張、積極的な飼育へと手掛けていきました。1972年には、1万1千USドル(330万円)をかけた、160坪の蚕室と堆肥舎、繭乾燥装置、井戸などが完成しました。

また、1973年には、^{そざい}蔬菜技術を持った清水芳洋氏(後に青年海外協力隊に転出)が派遣されてきました。また、1974年には畜産専門の山口明氏が赴任してきて、養蚕、蔬菜、畜産と農場運営のスタッフが揃ってきました。

一方、メインである養蚕については、繭の収穫量が今までの年間50～100キロそこそこだったのが、年数回の飼育で300キロ、500キロと順調に伸びていきました。

現地スタッフも充実し、「レイタク・カンバイ模範農場計画案」や「ラオス王国養蚕開発計画案」をたびたび作成しています。現農場を充実させ、それを核に一大養蚕団地を広げていこうという構想です。麗澤海外開発協会とラオス政府とでラオス蚕業開発委員会を組織し、その下に蚕業協同組合と養蚕普及所を設け、6年後には年間560箱の飼育、14トンの集繭量をめざすという壮大な構想でした。この背景には、北部からの難民が増えて



高床式家屋の中で機織り



4条の小型製糸機を使つての製糸作業



地鎮祭で祝詞を奏上する淡島氏



竹で編んだ現地式の飼育カゴに入れ、桑の葉を与える。もともと村で養蚕をし、糸を引いて機織りし、服にして着用（自給自足）

きたことや、日本政府も彼らの入植地を造成援助するなどの積極姿勢を見せていたこともありました。

そんな中で、日本国大使館の山下和夫参事官（帰任後、東宮侍従長）には何度となく農場にお越しいただきレイタクの事業展開をご理解いただくことができました。一方、私的な思い出ですが、私が一時帰国して結婚し再赴任する際、タイとラオスに水害が発生、バンコックで足止めに遭う事態になりました。結果的には列車、トラック、渡し船、人力車と乗り継いでビエンチャンにたどり着きましたが、その際も、大使館の玄関まで出迎えてくださるなど、忘れることができない温かなお心づかいを頂戴いたしました。

しかし、その後1974年にラオス王国から連合政権樹立への政変が起これば、諸々の事情が重なり、我々に追い風が吹くことはありませんでした。今、手元に当時書いた手書きの計画書が何部か残っていますが、よくここまで綿密に書き上げられたものと、我ながら感心している次第です。ただ、結果的には実現しなかったわけですから、今にして思えば「カンバイ農場にのみ集中し、足元をもっと固めるべきだった」「政府援助に頼ろうとすべきではなかった」などの反省もありますが、当時としては最善の策を模索した結果だと思っています。

苦労の中で見いだした温かい出会い

ラオスでの事業の運営について、困難を感じたり苦労したりしたことは尽きませんが、今思い起こせば貴重な体験だったと、プラス面のほうが多かったように思います。

当初は、金銭面ででのやりくりには苦労しました。協会設立前は送金方法がなく、何度か樋口幸夫氏（事務管理室経理担当、元廣池学園経理部長）と日銀に相談に行ったりしました。カンバイ氏との金銭的な面での共同運営についてもかなり苦労しました。取り決めでは折半になっていましたが、両者が資金を出し合ってプールしたお金を使うというのであれば、その都度相談して出せばいいのですが、そうしたシステムもなかったため農場運

営のほとんどはレイタク・カンバイ農場から出し、ときどき繭の売り上げがカンバイ氏から入ってきていました。今から考えれば、両者の話し合いでもうもう少しまく切り盛りすればよかったのですが、当時としては現場で肥料がいる、ブルドーザーを入りたい、労働者が臨時で必要だといったタイムリーな仕事をこなしていくには仕方がなかったのかも知れません。

労働者を常時数人使うようになっていましたが、1人に月給5千キップから8千キップ(10～16ドル)、家事を切り盛りしてくれる家族には7千キップ(14ドル)支払っていました。なお、我々の給料は当初100ドル～200ドル、途中からは140ドル～240ドル(～71年=@360円、72年～=@300円、73年=@260円)に上げてもらいました。政府派遣の専門家や協力隊の人たちと比べると決して多くはありませんでしたが、みんな不満に感じることなく結構楽しくやっていました。

この頃のよい思い出といえば、現地でのさまざまな人との出会いです。最初に1人で赴任した当初は、カンバイ氏宅の1室で寝起きしていました。食事時になると「シマー(アワシマ)、キンカオ(食事)」と子供たちが呼びに来てくれ、家族の人たちと一緒に食事をしていました。お金持ちの家ですから、おいしいものもありましたが、どうしても手をつけられないものもありました。そのうち、気候に馴れないこともあってか、だんだん痩せていったので、日本人医師の勧めもあって、日本料理屋さんの月極定食を食べるようになりました。カンバイ氏の家での毎日の食事は辞退しましたが、その家族の温かい気持ちは今も忘れることができません。

また、ラオス経済計画省の計画課長としてウドム・ラタナヴォン氏(現・竹原茂麗澤大学名誉教授、麗澤海外開発協会前副会長)が日本留学から帰っていたので、よく役所へ訪ねて行きました。そ



カンバイ氏次男の結婚式パーシー



カンバイ氏長男の表敬訪問
廣池千太郎先生を囲んで(1982年)

の後の政変もあり、彼の立場は微妙なものとなり、再度日本に来ることになりましたが、国の体制如何によっては、麗澤海外開発協会のその後の展開も違ったものになっていたかも知れません。しかし、協会設立以前から日本とラオスで何かとパイプ役を果たしてもらった彼とは、今日までご縁が続いています。

ラオス産業の開花を願って

私は1969年から74年までに2度、一時帰国をしましたが、ラオス養蚕開発に微力ながら足かけ5年携わることができました。この間、「開発途上国において文化・経済の発展に協力する」という協会の設立趣意にどこまで忠実に実行できたか、今改めて振り返って自問自答してみると多くの反省材料が思い浮かんできます。

廣池千太郎会長(当時)からは、「慌てても結果がすぐに出るようなものではないんだから、長い目でじっくり取り組みなさい」と激励をいただき出発したものの、少し結果を急ぎすぎたかも知れません。高度の農業技術を持ち合わせた人が必ずしも開発事業にふさわしいとは限りませんが、我々には、技術に裏打ちされた戦略に少し欠けていたかも知れません。

我々の活動がラオスの産業開発への導火線となって華々しく開花する、というのは大きすぎる夢でしたが、池田氏から始めて、それに続いた何人かの情熱と麗澤の物心両面から支えてくださった精神がラオスのどこかに生きていたとしたら、これ以上の喜びはありません。世界のニュースの中でもあまり報道されない小さな国ラオスですが、平和で、争いのない安定した国家になっていくことを願ってやみません。

ラオスの国花
プルメリア

